

S.C.WORKS 今週のスタディ！

【ヘッドライン】

- 1) 「キューピー、高齢者用フルーツデザートを発売」
- 2) 「ブロッコリーで健康に？ ドールが機能性野菜」
- 3) 「農学系 集まる熱視線 食の安全・バイオ…裾野広く」

1) 「キューピー、高齢者用フルーツデザートを発売」

キューピーは21日、高齢者向け食品「やさしい献立」シリーズの新商品として、フルーツデザート「とろけるデザート」「すりおろし果実」を23日に発売すると発表した。果汁を飲み込む際にむせたり皮をむくのが面倒といった高齢者の果物に対する不満点を考慮し、食べやすさにこだわった。新たにデザートカテゴリーの追加で、同シリーズの年間売上高を昨年度比約6割増の28億円に引き上げたい考えだ。

新商品は「高齢者は果物好き」という総務省のデータに着目して開発。「とろけるデザート」（158円）は、高齢者が早く飲み込んでむせないよう、とろみをつけ、ゆっくりと喉を通るように仕上げた。また、容器は高齢者でも持ちやすいよう工夫した。「すりおろし果実」（189円）は、果実をすりおろしてゼリーでもジュースでもない独自の食感にこだわった。味は桃など各3種を用意した。

同社が調べた在宅介護における食の悩みでは「食欲低下」と「栄養不足」が上位であることが判明。新商品はこのことを考慮し「好物を食べやすく提供することによる『食欲喚起』を図り、栄養不足にも対応した」（商品開発本部）。今後は高齢者にも購入しやすいよう、販路をスーパーマーケットなどの量販店に拡大するほか、通販体制も強化する。

在宅介護における悩みは、高齢者と同様に病人や体調を崩している人にも言える悩みだと思った。体調が悪いと食べて栄養を取らないといけないとわかっているがどうしても食欲が低下してしまう。一人暮らしならなおさらで、こういった手軽に食べやすい食品が増えてくると、高齢者のみならず喜ぶ人も多いと思う。スーパーなどでも専用コーナーが来ているお店もあり、これからも拡充して欲しい。

2) 「ブロッコリーで健康に？ ドールが機能性野菜」

青果物販売大手のドールは特定の栄養成分を高めた機能性野菜をシリーズ化して発売する。第1弾として生活習慣病を予防する効果があるとされる成分を多く含むブロッコリーを発売する。来年以降、トマトなど果菜類や葉物野菜を発売しアジア各国への輸出も検討する。

9月から植物栄養素の一種であるスルフォラファンという成分を通常より2.5-3倍含むブロッコリーを販売する。スルフォラファンは体の抗酸化作用や解毒力を高めるとされる。米国から仕入れた種を北海道や長崎に持つ自社農園で育てる。初年度で20万株を発売し、来年度は10倍以上に増やすという。価格は1株400-500円を予定し、高級スーパーやデパートで販売する。

シリーズは最終的に10種類程度にし、香港やシンガポールなどへの輸出も検討する。同社の大滝尋美シニアマネージャーは「健康志向の高まりや高齢化が進んでいることから、効率的に栄養素を摂取するのが求められていることが開発の背景だ」と説明する。

野菜の摂取量が少なくても栄養量が補えていればOKなのか詳しく知らないが、もしそれで補えるのであれば、機能性野菜というのは農地や農業の担い手が少ない日本にとって魅力的な農作物なのではないか。そもそも国土が狭く農地拡大は望めないため「安心・安全・高機能」をウリに野菜に価値を付け、農作物の輸入大国から輸出大国になることも不可能ではないと思う。今後の進化に期待したい。

3) 「農学系 集まる熱視線 食の安全・バイオ…裾野広く」

大学の農学系学部に着目が集まっている。

学部や学科の新設が相次ぎ、入試の競争率もじわじわと上昇。女子学生の増加で地味なイメージが払拭されつつある。食の安全や環境・エネルギー問題など現代社会が抱える課題の多くにかかわる学問として、裾野の広さが魅力となっているようだ。

東京農大は2014年、応用生物科学部に「食品安全健康学科」を新設する。輸入食品の農薬問題や東京電力福島第1原発事故で懸念が広がった農産物への放射性物質の影響など「食の安心・安全」に着目が高まっていることが背景。健康を支えるサプリメントや特定保健用食品（トクホ）などへの関心も集まる。

法政大は08年に新設した生命科学部の生命機能学科植物医科学専修を拡充し、14年に応用植物科学科を設置する。同大学の中で唯一、農学系の領域を扱う専修として卒業生を2回出し、「入試や就職で手応えが確認された」ことから、「格上げ」が決まった。

爆発的な人気ではないというが、受験倍率は08年に11.6倍だったのが12年度は20.9倍に。「出口」に関しても、希望者全員が官公庁や食品関連企業に就職した。

学ぶ内容は「文理融合型」。遺伝子やバイオといった理系の領域だけでなく、農業政策や環境問題、エネルギー問題など幅広い。理系であるにもかかわらず、女子学生の比率が4割以上と高いことも同専修を活気づける。新学科の設置準備に携わる西尾健教授は「仕事として食べていける、国際的にも活躍できる、と感じているのではないか。ゼミでは女子の頑張りが目立つ」と話す。

文部科学省の調査によると、全国の大学の農学系学部に着籍する女子の比率は1990年代から上がりはじめ、12年度は42.6%に達した。東京大でも全学部の女子比率の平均値は18%だが、農学部は28%と大きく上回る。

昔とは大きくイメージが変わってきているようだ。それだけ「食」に意識が向く世の中になったということだろう。自分の将来を考えた時に「需要があり長く勤められる職種」が選ぶ基準になるのは当然だと思うし、実際食は生きていくために切り離せないものだからそこに目が向くのも納得できる。強い日本にするためには生きる地盤を自分たちで築くことが重要だ。最初は「なんとなく」から始まったとしても、徐々に高い意識を持った若者が増えれば、日本の未来は明るいものになるだろう。